令和5年度学校教育目標 「より良い自分を求め、つながり合い、主体的に未来を切り拓く生徒の育成」

高月中だより

＜校訓＞
正しく
明るく
たくましく

長浜市立高月中学校
学校報　　第１３号
令和６年３月２１日発行
文責：柴田　俊一

第76回卒業証書授与式

3月12日(火)、令和5年度の卒業証書授与式を挙行しました。今年度で76回を数え、82名の生徒たちは、本校の1万3千人を超える卒業生の仲間入りをしました。この日は、天も別れを惜しんでいるかのように、朝から終日雨模様でしたが、長浜市教育委員会を始め来賓の皆様、そして多くの保護者の皆様の参列のもと、式は厳かな中にも感動的にそして盛大に行うことができました。

式辞の中で、はなむけの言葉として、「夢・目標をもち、逆算的に生きる」ことをお伝えしました。この言葉は、本校卒業生で、プロ野球ソフトバンク・ホークスにこの春より入団した、前田悠伍選手が語った言葉から引用したものです。彼は、これまで、中学1年生の時に立てた4つの目標である「大阪桐蔭高校入学」「甲子園出場」「日本代表入り」「プロ入り」をすべて叶えてきました。プロ入りが決まった彼は、取材に対し、「夢を持つこと。そこに向けて逆算して努力すれば、叶う確率が高くなる。自分は、それを一番大切にしてきた。」と述べています。

彼の中学・高校時代は、コロナ禍の真っ只中にあり、あたりまえがあたりまえでなくなった中でも、自分自身を見失わず、直向きに自らが課す自主トレーニングを行ってきました。そこには、彼の目指すべき目標があり、コロナ禍の混乱の中にあっても逆算的に「自分はどんな力をつけるべきか」「今何をすべきか」という確かな課題意識があったことでしょう。

これから向かう未来社会は、高度情報化・グローバル化がますます進展し、安全保障や環境問題、エネルギー資源の問題、少子高齢化など、先行き不透明な社会と言われていますが、先が見通せない時代だからこそ、流されるままに生きるのではなく、先を見据え、明確な目標をもって逆算的に生きる力が求められていると思います。「自分の人生の主人公は自分」です。よりよい自分、よりよい社会を目指して、課題意識を持ち、仲間と協働して、力強く未来を切り拓いていってほしいと伝えました。

在校生代表平川くんの心温まる送辞に続き、卒業生による答辞がありました。学年を代表し、齊田君、安済さん、大橋君の三人が、三年間の思い出とともに、仲間、ご家族、先生への感謝の言葉など、心を込めて述べてくれました。途中、合唱祭の学年合唱で歌った「3月9日」を再度全員で歌ってくれました。感情豊かなハーモニーは私たちに大きな感動を与えてくれました。

式の最後は式歌でした。これまで、各学年で練習を積み重ねてきた「旅立ちの日に」を全校生徒が歌いました。1番は1，2年生が、2番は3年生が、そして最後は全校で合唱しました。体育館中に歌声が響き渡り、式の最後を締めくくってくれました。

卒業生はもちろん、在校生も職員も全員が力を合わせ、すばらしい卒業式にすることができました。在校生の皆さんは、今まで行事や部活動、生徒会活動などでいろいろとお世話になった先輩たちの姿を心にしっかりと留め、次年度に向けて更なる成長を遂げてほしいと思います。

プログラミング学習

1年生は、2月から3月にかけて、プログラミング学習を行いました。この授業は、理科と技術科の特別連携授業として行ったもので、題材名は「動き続ける大地」、地震を扱った単元の最終の授業として実施しました。地震によってトンネルが崩落し、閉じ込められた人を探すロボットをプログラミングするという設定でした。扱うロボットは Sphero BOLT（スフィロ・ボルト）というもので、球体のプラスチックの内部にロボットがあり、専用のアプリケーションでプログラムすることにより、動かしたり、音や言葉を発したり、LEDのライトを光らせたりできる代物です。

生徒たちは、 先生の説明や助言を受けながら、2，3人のグループを組んでロボットの動かし方を練習し、慣れてきたところで、プログラムを実際に組み、ミッション通りの動きができるように何度も試行錯誤しながらロボットの動きを調整していました。最初は、思い通りの動きができなかったところも、回を重ねるごとにうまくいくようになり、自由な発想でいろいろなプログラムを追加したりしながら楽しく学習しました。

あなたの人生はついていましたか？

春は、別れと出会いのシーズンです。卒業や進級で、新たな生活を迎える皆さんに、伝えたいお話があります。皆さんは、松下幸之助（まつした　こうのすけ）という人をご存じでしょうか。今はもう亡くなっておられますが、彼は松下電器産業株式会社（NATIONAL:現パナソニック）の創業者で、「経営の神様」と言われた人物です。彼の経営哲学は、「人（社員）を大切にする」で、良い商品を作るために、その製作にあたる人づくりに力を入れたことは有名です。

その彼が、社員の採用を決める面接試験の時に決まってある質問をしたそうです。その質問とは、「あなたの今までの人生は、ついていましたか（運がよかったと思いますか）。」

皆さんなら、どのように答えますか。「ついていました。」「ついていませんでした。」どちらでしょうか。あるいは、「ついていませんでしたが、自分の努力で道を切り拓いてきました。」と答える人もいるかもしれません。

では、松下氏はどのように答えた人を採用したのかと言えば、「ついていました。」と答えた人の方を積極的に採用したようです。この真意は、次のとおりです。

「ついていなかった。」と答えた人は、自分の身の周りにいる人や出来事のありがたみに気づかない思考の癖がついてしまっている人です。また、「ついていなかったけれど、自分の力で道を切り拓いてきた」と答えた場合も、人や出来事に恵まれた一面に気づかず、周りに感謝せず、自分の力だけでここまできたと思っていると捉えられるわけです。もちろん、中には家庭環境や経済面で厳しい状況の人もいるかもしれませんが、その中にあってもわずかなプラスの側面に気づける人かどうかがわかると思われます。これらのタイプの人は、何かトラブルがあった時に、「なんでこんな厄介な奴らばっかり当たるんや。」と文句を言ったり、「あなたは、運良くそんな厄介な人に当たってないから、そんなことが言えるんだ。」などと口にしたりします。そんな人をもし雇ってしまったら、顧客とのトラブルが絶えず、また文句ばかりの職場になり、社員の士気も高まりません。

逆に、「ついていました。」と答える人は自分の身の回りの人や出来事のありがたみに気づき感謝しながら生きられる人です。このタイプの人は、誰かからお叱りを受けても「この年になって、こんなに叱ってくれる人がいることはありがたい。」、顧客からクレームを受けても、「こうして言ってもらえたから、現状をより良く変えるチャンスを与えていただいた。」と考えます。すなわち、何事にもありがたみを感じ、プラス思考で捉えられる人だということになります。

このように、社会を生きていく上では、物事や自分の置かれた状況の捉え方・考え方が重要であり、周りに対する感謝の気持ちを忘れず、そして、プラス思考で生きることが人生を切り拓くことにつながるということですね。これから新しい生活を送る上での参考となればと思います。